私の生き方 社会科教員への道のり（第二回）

小林　朗

2　中学校社会科教師の衝撃

(1) 塩沢中学校

私は大学院に残って歴史学の研究をしたかった。しかし、母が尿毒症になり、人工透析を始めることになって新潟へ帰って来てほしいと両親から懇願された。教員採用試験も準備していなかったので、1年間、三条東高校の非常勤講師をして国語の古典を教えた。

高校の歴史の教員になろうと思っていたが、現在と同じで新潟県は歴史の新採用の採用がほとんどなかった。そのため、歴史が教えられると思い、翌年、中学校社会科教員の採用試験を受けて合格した。最初の赴任校だった南魚沼の塩沢中学校へ勤めることになった。塩沢中学校は3年間勤務したが、荒れている時代だった。この中学校は石打、上田、中之島、塩沢地区の4校の中学校を統廃合してできた学校で、バス通学が行われていた。社会科の授業は1コマしかなく、免許外の技術の授業を持っていたこともあって、何回も教師を辞めようと思っていた。その中で教師を続けることができたのは中学生との交流と、歴史教育者協議会の先生方との出会いであった。塩沢中学校に一人おられ、もうお一人は小学校教師で二人の会員に恵まれた。その方々に多くの相談ができたのである。

1985（昭和60）年、県歴史教育者協議会の研究会が南魚沼であり、藪神小学校の土田光男先生が「戦没者の墓石は語る」という公開授業をされた。小学6

年生の歴史学習で、薮神地区の墓石調査をして戦死者168人の戦死先を調べて地図を作成した。26名のクラス中、5名の戦死者を出している世帯があった。資料集めの中で、遺言書があり、授業の最後に土田先生は音読され、教室は涙を流す児童、参加者がみられた。

この授業をみて私は感動した。教師から自ら子どもと地域教材をつくり、授業にしたのである。これを塩沢中学校でも実践することにした。大学での地域のフィールドワークの体現でもあった。

同年の秋、指導主事訪問のとき、「15年戦争と塩沢」の公開授業をした。夏休みに2年生の歴史の宿題として、自分の地域の墓調べを出した。塩沢は先の4地区で、地域に墓があり、そこには戦死者の死んだ年と場所が表示されていた。圧倒的に中国での戦死者が多く、新木橋という地域で亡くなっていた戦死者が多かったことがわかる。それを地図に中学生が書いた。陸軍で徴兵された方が多かったのである。

塩沢はシベリア抑留された方が多かった。知り合いに紹介していただき、体験者数人にインタビューをし、授業で紹介した。

中学生は教科書にある15年戦争が塩沢にもあったことを実感した。

大学での近代史研究会の学びを中学歴史学習で実践しようとした。3年間勤務した塩沢中学校では歴史学習で以下の4つの授業を行った。

①上田庄の長尾氏、秀吉の朝鮮侵略の欠落闘争（朝鮮へ行きたくない、で逃げる）
②化政文化の鈴木牧之
③自由民権運動の塩沢ー田村寛一郎の私擬憲法草案
④15年戦争と塩沢

当時、南魚沼は湯沢を中心として、西武資本が地域開発を行っていた。出稼ぎはなくなったが、スキー観光の矛盾を私は調べていた。民宿の実態を調査をしていたが、生徒たちの家も多く、授業実践までには至らなかった。

塩沢の歴史を調べていく中で、上野（こうずけ）国（群馬県）との交流が多いことがわかった。巻機山の付近の沢口ダムに朝鮮の方々が強制労働されていたことを地域の人の聞き取りで知ったが、実際の史料を発掘することはできなかった。

地域調査はなかなかうまくいかないこともあったが、授業化できるときは中学生の躍動した表情を忘れることができない。

（2）長岡江陽中学校

塩沢中から、長岡市のベットタウンになっていた地区の江陽中学校へ異動になった。

ここも3年間の勤務であった。長岡市は地域の偉人、河井継之助と山本五十六を小学校から学習していた。私は人物史ではなく、地域史を歴史学習で実践しようとした。調べる中で、次の4点を地域教材で行った。江陽中の中学生も地域に歴史があったことを知ると、目が輝いた。自分たちの地域にも教科書にある歴史があることに衝撃を受けるのである。

①馬高遺跡と火焔土器
②中世と蔵王城
③長岡藩の牧野氏と戊辰戦争
④長岡空襲と長岡花火

長岡時代、指導主事訪問で公開授業を私がすることになった、私はあえて、田中正造全集から史料をとって、田中正造と農民の谷中村のたたかいの授業をした。「なぜ遊水池になる谷中村に農民は残ったのか」というテーマで展開した。政府の強制執行で退去を要請する中で10数軒の農民は残留し、田中正造はそれを支援する。残留した農民について、中学生は疑問を持ち、自分と重ねて考えてゆく。

大学で調べていた足尾銅山鉱毒事件を授業にしたのは私にとって画期的であった。まさに、大学でやってきたことの総決算ともいえた。

中学の歴史学習はいかに当事者になって歴史を考えることができるかが鍵である。そのために地域教材は有効だが、中学生は歴史の民衆にも共感できる。

長岡時代、市内の知り合いの小中学校教員で、「子ども学級学校を語る会」という自主サークルを月1回、公民館で行い、若い教員同士が集まって交流した。学級崩壊が言われ始めていた時代でさまざま話し合いをした。子どもの見方、地域に根ざした学校について協議していた。新潟県の場合、小中学校、特別支援学校には学閥があるので、本音で話せる場が必要であった。授業だけでなく、教師自身も地域の学校でどのような

仕事をするかが問われていたのである。

（3）新潟藤見中学校

6年間の新採用期間の異動が終わるので、出身地の三条へ戻るかと思っていた。しかし、歴史教育者協議会の会員で組合運動を熱心にしている方々から、新潟市へ異動して来ないかとお誘いがあった。新潟市への異動をすることになった。

学閥は私を新潟市へ異動させたくなかったらしいが、直接教育委員会へ直訴をして異動ができた。もちろん、組合の力も大きかった。

藤見中学校は荒れていた。暴力をどのようにしていくかが大きな課題であった。

歴史学習は地域教材は次の4点で行った。

①古代の蝦夷対策の拠点、ぬたりのき渟足柵
②通船川と新田開発
③木崎争議と河渡の農民たち
④新潟水俣病と大形地域

地域は古代のヤマト王権のえみし蝦夷対策の日本海側の拠点であるぬたりのき渟足柵の碑があった。新潟県歴史教育者協議会の会長であった小林昌二新潟大学教授がこの研究の第一人者であったので説明を受けて授業を実践した。

また、この地域の小学校附近に通船川が流れていた。この川は信濃川と阿賀野川を横に結ぶ川であった。江戸期の吉宗の享保年間につくられた。越後は水とのたたかいであった。この川から新田開発や洪水防止を行ってきたことを授業で実践した。

地域には「こうど（河渡）」という地域があった。中心の高台に大形神社が鎮座している。大形神社前の村の道路は広くなっていた。農業と阿賀野川の漁業の両業をやっていた。魚を捕る網を道路に干すのであった。この地域は木崎争議を支援する滝沢要平をリーダーとする農民たちがいた。木崎争議の集まりに、自転車部隊で出かける。濁川地域にある久平橋で、待ち構えていた警察に捕縛される。いわゆる久平橋事件である。小作争議に参加した農民たちの歴史が刻まれている地域であった。木崎争議を歴史学習で実践したときに、中学生たちは驚きと嬉しそうな表情を今でも覚えている。自分たちの地域の歴史に誇りをもったのである。

授業を通して、中学生が生活を改善していく変容を何度もみてきた。

隣接する海老ヶ瀬地区（大形地域）は新潟水俣病の患者が多発した。公民の公害学習でも実践するのだが、歴史学習の高度経済成長の授業で新潟水俣病を行った。

新潟市へ異動するときの新潟市教組の組合の委員長が吉田三男先生で新潟水俣病の研究家であった。吉田先生と坂東克彦弁護士に依頼を受けて、足尾銅山鉱毒事件のフィールドワークのガイドをした。初の公害といわれている足尾銅山鉱毒事件を学習することが目的であった。坂東弁護士が田中正造全集を読み込んでいたのに驚愕した。

歴史教育者協議会編『おはなし歴史風土記　新潟』（岩崎書店）をつかって、木崎争議と新潟水俣病の授業の導入で行った。

藤見中学校から、新潟市の中学校を異動していくが、パリ・コンミューンに先立つこと100年の新潟みなとの打ちこわし（新潟明和騒動）の授業は市内のどの学校でも実践した。江戸時代、2か月間といえ、長岡藩の武士の支配から町民自治を行ったことは日本史上、例をみない。新潟が誇れる歴史といえる。中学生が目を輝かせる授業である。この授業も『おはなし歴史風土記』を導入で使う。中学生と最初に読み、質問をしていく。

新潟港の繁栄は長岡藩支配の新潟町（現新潟島）は発展した。人口も増加し、廻船問屋の他に、新市街に小宿・附船などの港湾機能を支える業者が集まり、日雇いなども多くの流入し、新潟町は中下層民が多く居住する。米価高騰と長岡藩の御用金賦課をきっかけに起こった打ちこわしは、涌井藤四郎を代表とする自治的町政を行う。この主体が新市街の住人であった。特権商人と新興商人の軋轢からおきた打ちこわしであった。この授業は官製の市内中学校の社会科研究会で公開授業を行った。歴史教育者協議会の加藤文三さんが講師で来ていて、私の授業をずっと参観していた。

（4）新潟大学教育学部への内地留学

藤見中学校が荒れている中で、自分の授業改革をしてゆきたいと強く思うようになってきた。それは授業を丁寧にすれば、中学生は落ち着いていく実感があった。

新潟大学教育学部へ内地留学（修士課程）をして、

歴史学ではなく社会科教育を専攻しようと決めた。テーマは地域教材を扱った歴史学習であった。

新潟大学教育学部の日本史は中世史と近世史の先生がおられたので、中世史の田村裕先生に教授をお願いした。私を含め中学社会科教員が「荘園制をどう教えるか」で悩んでいることが大きかった。永原慶二、網野善彦氏の本などをたくさん読んだ。特に、越後の中世史を学ぶことができたのは収穫であった。領域型荘園であった胎内市の奥山庄絵図は授業化することになる。中学校の歴史学習は領域型荘園でよいという結論を得た。中世の越後が阿賀野川以北が領域型荘園が広がる荘園の地頭、国人の世界で、米山以西は朝廷の役人である在庁官人の世界であったことも地図によって学習した。上杉謙信の関東出兵の家臣団構成など初めて知ることばかりであった。

同時に、人文学部の歴史学の講義も受けられた。県歴史教育者協議会の会長の小林昌二先生、幕末維新史の佐藤誠朗先生の講義も聞くことができた。特に、大学時代に近代史を専攻していたので、佐藤先生の講義は面白かった。講義は近江商人から幕末維新をみる歴史で興味深いものだった。ペリー来航時、慌てていたのは幕府で、民衆は黒船にビスケットやウィスキーをもらいに小舟で近づく史料を使った講義もあった。(4)それは民衆のしたたかさを示し、今でも授業では中学生が喜ぶ教材になっている。

教育学部の教育史の八鍬友広先生（現東北大学）の講義も参考になった。八鍬先生はめやす（目安）往来物の研究家であった。これは17世紀前半に行われた百姓一揆や地域間紛争において作成された訴状を読み書きのための教科書になっていた。地域的には東北地方と越後、信州の一部地域に分布している。新潟町の信濃川中州の帰属をめぐる長岡藩支配の新潟町と新発田藩支配の沼垂町の争論において提出されている目安往来物であった(5)。八鍬先生から目安往来物以外にも歴史学のことで多くの示唆を受けた。

所属するのは社会科教育のゼミであった。高山次嘉先生と宮薗衛先生が指導教官であった。具体的な授業実践について多く学んだが、ウォーラースティンの世界システム理論やポパーのサーチライト理論なども学んだことは、その後の授業理論に役立った。そして、小中高校の多くの授業を参観できたことは有意義といえた。特に、小学校の社会科授業は単元学習で本当に

参考になった。ある市内の小学校の「かまぼこ工場へ行こう」の子どもの意欲ある眼差しは忘れることができない。後年、歴史教育者協議会の安井俊夫さんが著作(6)で小学校の授業が参考になったと書かれていたが、私は大いに納得できた。授業参観の他に、歴史教育者協議会や民間教育団体の社会科の授業実践について多くの資料を読むことができた。私の今後の授業改革への転換になった。

内地留学が終わった後で、私は藤見中学校で県歴史教育者協議会の公開授業を行った。3年生の公民授業で、「原子力発電所は必要かどうか」という討論授業を実践した。中学生が電力の必要性から賛成、安全性から反対、どちらでもない棄権に分かれて最終的に投票した。このときは千葉から加藤公明さんをお呼びして協議をした。

(4)佐藤誠朗『近江商人幕末・維新見聞録』(三省堂)・『近江商人幕末・維新見聞録』(三省堂)
(5)八鍬友広『闘いを記憶する百姓たち』吉川弘文館
(6)安井俊夫『社会科授業づくりの追究』日本書籍

（こばやし　あきら・新潟市）

生成系AIの「Bard」（グーグル）に、質問をしました

「年に2回教育関係の記事を15篇ほど掲載した雑誌を発行しています。その雑誌がたくさん読まれるためにはどんな工夫が必要ですか」

以下は、その回答です。

・ターゲットを明確にする。（雑誌のコンテンツやデザインをターゲットに合ったものにすることができます。）
・ターゲットにとって興味深く、役立つ内容にする。（読者が雑誌を読んでくれる可能性が高くなります。）
・わかりやすく、読みやすい文章にする。（読者が雑誌を最後まで読み進めやすくなるでしょう。）
・雑誌のデザインを魅力的にする。（読者の目を引くことができます。）
・雑誌の宣伝を積極的に行う。（雑誌の存在を多くの人に知らせることができます。）

次号（139号）をお楽しみに（笑）。

（小東）